

夜長姫と男

夜長姫 と男 写真

原作：坂口安吾

耳男

夜長姫

アナマロ

師匠

小釜

青笠

B A

ほか

序章 夜長姫の記憶

幕が開けると、舞台中央には、小屋（部屋）を簡略化したような造形の建物。多数のロープによる装飾されている。

地面には、短く切ったロープが散乱。

また、クワなどの農機具が散らばっている。

場面は冒頭、A・Bによる美術品の品評会のような場面から始まる。

B A
はい、それでは。

A ヒダの名工、青等殿の作品を、披露いたします。
B はい、それでは。

B、作品にかけてある布を外すマイム。
二人、見えない作品を見ながら、

二人 おー。

A これは、

B なかなか、

A うーむ、

B ははあ、

じつくりと作品を見る二人。

A いや、素晴らしい。

B 傑作だ。

A この・・・何とも言えない、完全な曲線を描いた頭の丸み。

B はい。

A そして、見事なまでに計算され尽くした頭部と胴体のバランス。

B 全くその通りです。2等身、いや、1.5等身。

A それでも、存在に全く違和感がないのが素晴らしいじゃないか。

B それに、頭の球体も美しいが、その他の各部位も見事な球体で構成されている。

A 慧眼だね。

B この、赤い鼻の見事なまでの球体、完璧だ。

A この鈴の下の腹の白い部分。

B 計算し尽くされている。

A それに、手まで見事な球体だ。

B これでどうやって、物を握るんだ。

A いや、待て。

B なんだ？

A もう、彼は、物を握ったりはしないのではないか？

B ほう。

A 指はないが、ものを吸い付ける力を持っているとしたら、

B さすがだ。

B このように、ものを出す。(ポケットから)

A 美しい所作だ。
B しかし、一つ指摘するところがあるとすれば、
A なんだ。
B じゃんけんができない。
A うーむ。
B いや、それにしても、
A ああ、
B 見事な、
二人 ドラえもん。

間。

A 続きまして。
B はい。
A 同じくヒダの名工とうたわれる古釜殿の御子息で、チイサ釜殿の作品を（披露いたします。
B はい、それでは、

B、作品にかけてある布を外すマイム。

二人 おー。

A これはまた、
B なかなかどうして、
A いやいや、
B 恐れ入りました。

じっくりと作品を見る二人。

A まるもって、この容姿に漂う気品はどうだ。
B 確かに、俗世間からはいつせいの隔絶をされているところに存在する崇高さを感じる。
A きっと、生活が裕福なのだろう。
B いわゆる、金持ち、と？
A しかし、それでいて嫌味を感じさせないのが不思議だ。
B その通りだ。恐らく、彼は、
A はい、彼は、
B 彼は、全く争いを好まない、平和主義者なのだろう。
A 確かに、彼が争いをしているところを想像できない。

- A B 恐らく、彼は、
A うむ、彼は、
B 運動神経よし、勉強よし。
A 完璧じゃないか。
B そして、育ちも良い。
A 出来過ぎじゃないか。
B え？
A 出来過ぎじゃないか！

二人、目を合わせる。が、やがて、

- A それに、この特徴的な髪型はどうだろう。
B ううむ、実に個性的だ。
A この独創的な、前髪。
B その通りだ。風もないのに、風になびいているようだ。
A まさに優雅な彼の性格を象徴している。
B 恐らく彼は、
A はい、
B 1965年8月7日生まれ。B型獅子座。「好きな食べ物は寿司、海老のコキール、酢豚、イタリアン。宝物はスイスの高級時計。オードリー・ヘップバーンの大ファンだろう。
A 詳しいな。
B 毎日、習い事をし、送り迎えはじいのロールス・ロイス、口癖は、
A ベイベー。
B いやあ、これは、
A 見事な、
二人 花輪くん。

間。

- A 続きまして。
B はい。
A ヒダ随一の名人とうたわれた名工のお弟子さんで、耳男殿の作品をご披露いたします。
B はい、それでは、

B、作品にかけてある布を外すマイム。
二人、やや虚をつかれて、

A ほほう。
B 見事な厨子に入っているのですな。

A、厨子を開ける。

A
ギー

瞬間、二人、悲鳴あげる。

二人 ぎゃあああああー！

二人、腰を抜かす。

音楽。

恐怖に慄いている二人。

A な、なんだこれは！

B お、恐ろしい！

A この世のものとは思えない！

二人 バ、バケモノだー！！

音楽、高まり、場面は、夜長姫と耳男の会話を切り取る。

夜長姫 耳男 耳男が作ったの？ このバケモノ。

耳男 は、はい。

夜長姫 珍しいミロクの像をありがとう。他の二ツにくらべて、百層倍も、千層倍も、気に入りました。

耳男 はい。

夜長姫 耳男、ありがとう！

音響の律動が高まっていく。

第一章 タクミのシゴト

場面、一転して静寂。

美しい着物を着た夜長姫が、静止したまま立っている。
そこへ、アナマロ登場。

アナマロ ああ、どうも。こんな山奥までようこそ、いらつしやいました。——ああ、あの像、そうですか、気に入っていただけましたか。——ええ、そうですね。見事な像です。ああ、お手は触れないでください。ええ、気持ちは分かりますが。確かに、生きていますからね。本当に、命が宿るということは不思議なことです。どんなに上手くこきえても、それが生きてるように見えるかどうか確かではありません。ですが、傑作と言われる作品には、不思議と命が宿るように見えるものです。——ええ？ この姫？ そうですか、この姫のお話をお聞きになりたい。少し、話が長くなりますが、よろしゅうございますか。そうですか、それでは、少し、お付き合ってください。

アナマロ、姿勢を正し、

アナマロ 乗鞍山の麓、ヒダの山奥には、多くのタクミが腕を磨いておりました。

場面 変わって、『大改造II劇的ビフォーアフター』の音楽。

女子高生の像たちが運ばれてくる。

ナレーション 演劇的ビフォーアフター！ ぱふぱふ。本日の依頼は、この女子高生の像。どこからどう見ても、つまらなそうです。とてもこれから自撮りを取るとは思えません。この女子高生の像をリフォームするのは、飛驒のタクミ。耳男！

耳男 登場。

ナレーション さあ、タクミはこの像をどうリフォームするのか。おや、タクミがナグリとノミを取り出しました。

耳男 ナグリとノミを使って女子高生を削り直す。

耳男 カツカツカツカッカ…

耳男 女子高生のポーズを直して、キメポーズで自撮りをする女子高生の像になる。

再び、『大改造II劇的ビフォーアフター』の音楽（あの音楽）

ナレーション などということでしょう。仲の悪い女子高生の像は、匠の手によって生まれ変わったのです。

音楽途切れ、場面はアナマロの語りに戻ってくる。

アナマロ さて、こうして腕を磨いていた飛驒のタクミたち。そこにある仕事が無い込んできます。夜長の長者と申すものが、病弱な姫のためにミロクの像を作らせたいと思ひ立ち、飛驒の名人を集めて、腕比べをさせることになりました。耳男の親方は、耳男をスイセンして、

師匠、登場。ヨボヨボの爺さんである。

師匠 これはまだの、二十の若者だが、ガキのころからオレの膝元で育ち、特に仕込んだわけでもないが、オレが工夫の骨法は大過なく会得しておる。まだ若い、力のこもった仕事をしようよ。

耳男は、大きな耳をつけている。

耳男 し、師匠！親方にほめられたことなど、一度もなかったのに。だけど周りの者たちは、ついに親方もモウロクしたと、囁くんだ。

親方、ほ、本当に、俺なんかが、夜長の長者の仕事を、任せられてよいのですか。

師匠 ……あ？

耳男 いや、だから、俺なんかが本当に夜長の長者の仕事を、任せられてよいのでしょうか。

師匠 ……あ？

耳男 親方！

師匠 あ、ごめん寝てた。

耳男 やっぱりモウロクしてるんじゃないか。こんなんだから、みんな、俺が推薦されたのはなんかの間違いだとか言うんだ、

師匠 トメさんや、

耳男 うん、トメさんじゃないですけど、なんですか。

師匠 お昼飯は、まだですか。

耳男 うん、さっき食べたんですけど、完全にボケ老人じゃねえか。

師匠 (しゃんとして) 耳男。

耳男 お、急に戻った。なんですか。

師匠 わしはまだボケてはおりんよ。

耳男 は、はい、すみません。

師匠 わしはまだ、ボケてはおりん。

耳男 はい。

師匠 わしはまだ、ボケてはおりん。

耳男 同じ話何回もしちゃってますけど。

師匠 ボケてはおりん。

耳男 はい。

師匠 オレが病気のために、余儀なくお前を代理に差し出すのではない。ヒダの名人と技を競って劣るまいと見込んで差出すのじゃ。

耳男 もったいなきお言葉。

師匠 ああ、ただ一つ。

耳男 はい。

師匠 一つ、最後に教えじゃ。

耳男 なんですしょう。

師匠 ヒダの匠はな、命の不思議を刻まなくてはいかん。お前の仕事は美しいが、美しすぎる。命の不思議を刻むためには、力のこもったノミを打たなくてはいかん。これは、わしの師匠から伝わる教えじゃ。そして、師匠はそのまた師匠にそう云われ、そのまた師匠のそのまた師匠のまたまた昔の大昔の大親の師匠に云われ、そしてそのまた師

匠はそのまた師匠の、

耳男 長いですね、

師匠 恐竜のいた時代から、

耳男 それは。

師匠 嘘じゃ。

耳男 でしょうね、

師匠 いいか、さあ、行くのじゃ。乗鞍山の麓、夜長の長者のもとへ！

第二章 乗鞍山の麓

旅立つ、耳男。

単調な音楽の中、耳男が歩みを進めている。

耳男 ザック、ザック、ザック……

耳男 飛驒の山の中を歩いていく。

その一歩一歩が、異世界への道である。

やがて、

耳男 ここか。

耳男 ムラに辿り着く。屋敷の前で、

耳男 頼もう。

アナマロ出てくる。

アナマロ はいはいはい。

耳男 夜長の長者の面前で、仏像を刻む腕比へに呼ばれた。

アナマロ ああ、はいはい、あなたが。はいはい。私は、夜長の長者の使いで、アナマロと申します。

耳男 耳男です。

アナマロ 聞いてますよ。向こう見ずさんですな。どうぞごちそうさ。

耳男 いや、耳男だ。

アナマロ ええ、ええ、わかってますよ。向こう見ずさん。

耳男 いや、耳男だ。

アナマロ ええあ、いや、違いますよお。師匠のモウロクを真に受けていらした、向こう見ずさんと言っているんですよ。あ、そこ、へびますから、気をつけてください。

耳男 え？

耳男 足元を見るとヘビ。

耳男 (驚いて) うわあ。

アナマロ この辺は、ヘビが多くて。

耳男 威勢を取り戻し、

耳男 ちょっと待てよ。向こう見ずかどうかはオレのワザを見てから考えてくれ。

アナマロ ひっひっひっひ。はいはいはい。そんなに怒らないでくださいよ。ですが、今回はかりは、劇的ビフォーアフターとはワケがちがいますぞ。あなたが腕比べをするのは、ヒダの名人たちだ。

耳男 相手に不足はない。

アナマロ ひっひっひっひ。分かりました分かりました。しかし、あなた様は仕合せ者ですな。日本中の男が胸をこがす夜長姫サマのちかくで暮らすことができるのですから。ませいせい仕事を長びかせなさい。どうせかなわぬ仕事ですが。

耳男 どうせかなわぬオレならば、連れて行くことはありませんまい。

アナマロ ああ、そこが虫のカゲンですな。おっと、そこ、ヘビ、いますから。

耳男 ひい。

アナマロ それでは、ここでお待ちください。間もなく、夜長姫さまがお見えになりますから。

耳男 通された座敷に座り、姫を待つ。耳男 落ち着かない様子。

耳男 ふう。

アナマロ あら、まさか、緊張されているんで？

耳男 ま、まさか。

アナマロ む。ごほん。夜長姫さまの、おなーりー。

夜長姫 現れる。

耳男 頭を垂れる。

夜長姫 美しく登場。

耳男 やがて面を上げる。

耳男 ……

夜長姫の姿に目を奪われる耳男。

夜長姫 あなたが、耳男？

耳男 は。

夜長姫 なるほど、大きな耳ね。

耳男 ……

夜長姫 兎の耳のようだわ。けれど、顔は、馬ね。

耳男 え？

夜長姫 あははは、本当に馬にそっくり。

耳男 いや、

夜長姫 馬、馬ーあはははは。

耳男 (怒って) ちょっと、あんた！

夜長姫 ゲホゲゲホ。

夜長姫、突然咳き込む。

アナマロ 姫、大丈夫ですか！

夜長姫 ごめんなさい。

アナマロ あまり無理をなさらないでください。(耳男に怒って) あんたも！姫の前で大きな声を出さぬよう。

耳男 え、俺が悪いの？

夜長姫 いいの、どうせ早く散る命だから。

アナマロ 姫！

夜長姫 耳男、私ね、もうすぐ死ぬの。

耳男 え？

夜長姫 可哀想でしょう？

アナマロ 姫、滅多なことを言わんでください。

夜長姫 耳男。若いながらも優れたタクミだぞうね。

耳男 ええ、まあ。

夜長姫 劇的ビフォーアフターも見ていました。

耳男 はあ。

夜長姫 BS朝日になってからもちよいちよい見ているわ。

耳男 そうですか。

夜長姫 私の命はもう短いけれども、今生後生をまもりたもう、尊いホトケを刻んでもらいたい。私の気に入ったものにはホービを授けるわ。よろしくね、馬耳。

耳男 え？

夜長姫 あははは。本当に、馬の耳にそっくり。

耳男 いや。

夜長姫 ヒビンて言っでご覧なさい。

耳男 じ、…ひひん。

夜長姫 そうじゃなくて、ヒヒーンって。
耳男 ひひーん。

夜長姫 あはははは、うけるー。まじうける。
耳男 ……

夜長姫 右手を出して、
耳男 (右手を出す)

夜長姫 左手を出して、
耳男 (左手を出す)

夜長姫 握って、
耳男 (握る)

夜長姫 ヒヒン
耳男 なんですか、これは！
夜長姫 あはははは。

おちよくりまくる夜長姫。
隣で笑いをこらえているアナマロ。

耳男 やめてくださいよ。

夜長姫 怒った。怒った？暴れ馬。
耳男 やかましいわ。

夜長姫 あなたとは仲良くなれそうだわ。
耳男 え？
夜長姫 だって、ウマがあうもの。

耳男 おい！
夜長姫 (咳き込む) ゲホ、ゲホ、ゲホ。
アナマロ 姫！

耳男 ……なんなんだよ。

夜長姫 アナマロ、水、水をください。
アナマロ はい。

アナマロ、水を差します。

夜長姫 違うの、あれでちょうだい。
アナマロ はい？

夜長姫 あれで水をちょうだい。
アナマロ あれ？コップですか。

夜長姫 ちがうわ。

アナマロ ひしゃくですか？

夜長姫 違う。

アナマロ 水筒とか。

夜長姫 違うの。こう、水道の蛇口に、ゴムの管をさして、で、水をひねると、出てくる。

二人 ホース。

二人、耳男を指差す。

夜長姫 馬だから。あはははは。

夜長姫とアナマロ、大爆笑。

夜長姫 耳男、私とあなたは良い友達になれると思うの。夜、あなたのところに遊びに行くわ！

夜長姫が去り、。アナマロも続く。

耳男、恥ずかしさがこみ上げてくる。

耳男 おおおおおおお。

耳男 走り出す。

激しく音楽。

耳男 気がついたら、俺は走っていた。頭に血が上って、いても立つてもいられなくなったのだ。川の流れに沿って山の雑木林にわけ入り、一本の滝にまでたどりついた。

耳男 立ち止まって、

耳男 そして、滝の下で長い時間岩に腰かけていた。

夜長姫の声が聞こえる。耳男、頭を抱える。

夜長姫 まるで、馬の耳ね。

耳男 それからもずっと、夜長の姫の声が、耳について離れなかった。

音楽高まる。

第三章 ヒダのタクミたち

場面変わって、再び、屋敷か。虫の音が聞こえる。
青笠が、ノミを研いでいる。

青笠 サ、サ、サ・・・

そこへ、耳男。青笠、仕事をしながら、

青笠 ああ、ようやく戻ったかい。

耳男 あんたは？

青笠 俺は、仏師の青ガサだ。

耳男 あ、あんたが。

青笠 知っているかい。

耳男 あ、あんたのことを知らなかったらモグリだ。親方と並ぶ、飛驒の三大仏師の一人。

青笠 よろしくな、馬耳くん。

耳男 な、

青笠 聞いているよ。随分と、姫に気に入られたらしいじゃないか。

耳男 くそ、もう噂が。

青笠 しかし、あんたの師匠も、お前みたいな青二才を寄越してくるとは、モウロクしたもんだ。

耳男 青二才かどうかは、オレの刻んだホトケを見てから言ってくれ。

青笠 はっはっは、威勢がいいな。よっと、

青笠、木を運んでくるマイム。

青笠 ホトケはな、俺たちが刻むんじゃないんだぜ。もう、この木の中に宿っているんだ。俺たちはそれを、掘り出すだけなんよ。勘違いするな、

耳男 う・・・

青笠 こうやって木を眺めているとな、そこに浮かび上がってくるんだ。ホトケの姿がな。

青笠、木を見つめる。

耳男、思わずその姿に興味を持ち、

青笠 ・・・・

耳男 ・・・・見えるのか？

青笠 ああ、見える。

耳男 もう・・・？

青笠 (イメージを描いている) 頭

耳男 頭

青笠 胴体

耳男 胴体

青笠 ポケット。

耳男 ……ほ、ポケット？

青笠 よじげん…。(などと)

耳男 しぼらくして、フル釜の代りに悴のチイサ釜が到着した。

小釜 ズン、

小釜 大きな荷物を持っている。

小釜 ズン、ズン、ズン、ズン、ドサリ。

小釜 無言で座り、ノミを研ぎ始める。

小釜 サ、サ、サ、

耳男 あ、あんたが、フル釜の息子さんの小釜か。

小釜 無言で、ノミを研ぐ。

やがて、ノミを取り出し、何かを掘る様子。

耳男 あ、あんたも、見えるのか、

小釜 ずばり、見えるでしょう。べいびー、

第四章 耳男の耳

耳男 俺には、まだ見えていなかった。俺が一体、何を掘り出したら良いのか。耳につくのは、あの声だ。

と、夜長姫の声が聞こえてくる。

夜長姫 本当にウマの耳にそっくりだわ。

耳男 座り込んで考え込んでいる。

そこへ、夜長姫背後から、

夜長姫 本当にウマの耳にそっくりだわ。

耳男 ……また、この声が。

夜長姫 耳男。

耳男 ……

はじめて気配を察して吃驚。

耳男 わああああ。姫、一体、何ゆえこんなところに。

夜長姫 あなたの仕事ぶりを見に来たのよ。

耳男 仏を掘り出す現場に、土足でずけずけと上がり込まないでいただきたい。

夜長姫 あら、それは失礼。でも、私とあなたは、良い友達になれると思うの。

耳男 その意見には賛成できませんな。

夜長姫 そう。ゲホゲホゲホ。

耳男 夜風が身にしみるんじゃないやありませんか？

夜長姫 私ね、もうすぐ死ぬのよ。

耳男 そうですか。

夜長姫 耳男、頑張ってね。

耳男、無視をする。

耳男 ……

夜長姫 あら？ 聞こえていないのかしら。あれね、馬の耳に念仏。あはははは、

耳男 ……すみませんが、出て行ってもらえませんか。

夜長姫 そんなに怒らないで。私、あなたのこと応援しているのよ。ねえ、みんな三人の中で誰が勝つか賭けているの。私はあなたに賭けているのよ。でもあなたのこと、みんななんて言ってるか知ってる？

耳男 なんですか。

夜長姫 万馬券。

耳男 ……

夜長姫 馬だから。あははははは。

耳男 一体、何をしに来たのですか。

夜長姫 ニンジンが欲しいでしょう？

耳男 何を言っているのです。

夜長姫 馬が走るにはニンジンが必要でしょう？あなたが勝ったら、ホービをあげるわ。それもとびきり素敵な。

耳男 ホービ？

夜長姫 それはね、わ・た・し。

耳男 ……

夜長姫 どう？ この世の多くの男の人が、私のことを欲しがっているですよ。

耳男 姫。

夜長姫 何？

耳男 俺は、仏を掘り出すためにここにやってきた。ホービなどに目が眩むなんてことは有り得ない。ましてや、そのホービが、しなびたニンジンじゃあ、走る気力も失せかねない。

夜長姫 あら、私じゃフマンなの？

耳男 あんた、どれだけ自分に自信があるんですかい。あんたがニンジンだとして、あなた目がけて馬は走るかね。逃げ出すならまだしもだ。馬も人を選ぶものでね。気に入らなければ、後ろ足で蹴飛ばして逃げていくまでよ。

夜長姫 ゲホゲホゲホ、

耳男 もうすぐ死ぬんですかい？そりゃあ、可愛そうだ。

耳男 夜長姫のことを相手にしないといった素振りで仕事を始める。

夜長姫、その背後に無言で近づいていく。

夜長姫 ……

そして、耳をつまむ。

耳男 なんですかい。

夜長姫、懐剣を取り出す。そして、一太刀で耳男の耳を切り取る。

耳男 ぎゃあああああ！

激しい音楽。

夜長姫、切り取った耳男の耳を愛おしそうに見つめながら、

夜長姫 まあ、可愛らしい。

夜長姫、笑いながら去る。

耳男 うぐ、うぐうぐうぐ。

耳男、悶絶している。

耳男 はあ、ああ。

耳男、なんとか起き上がる。

耳男、なんなんだ。あの女……

耳男、這いつくばりながら、なんとかノミを持つ。

耳男、なんのこれしき……う……ははあ、俺の耳が。くそ、あの女め。くそ……魔神だ。魔神を刻んでやる。

耳男、憎しみが高じて、ギラギラとした目の輝きを生み出す。

耳男、魔神だ。俺の呪いをこめて、魔神を刻んでやる。

耳男、激しくノミを打つ。

今に思い知らせてやる。ははは、ゾクゾクしてくるぜ……

狂ったようにノミを打つ耳男。
やがて倒れる。

第五章 もう一つの耳

朝になる。

そこへアナマロがやってくる。

アナマロ、なるほど。馬小屋をたてるとすれば、まずこの場所ですが、ちと陽当りがわるくはないですかねえ。

耳男、起き上がって、

耳男、馬はカンが強いから、人の姿が近づくと仕事に身が入りません。仕事場には立ち入らぬように願います。

アナマロ、まあまあ、仕事場は荒らしませんから。ちよいとお話がありますから、外へ出てきていただけませんか。

耳男、小屋の外に出る。

アナマロ、まあ、座りなさいな。

耳男、なんですかい、あらたまって、

アナマロ 馬耳さん。よく聞いてください。あなたが青ガサやチイサ釜と腕くらべをしたい気持は殊勝ではありませんが、その、よく考えてくださいよ。あなた、耳をそがれて、痛かったでしょう？

耳男 ふん。・・・耳の孔にくらべると、耳の笠はよい物と見えてね、すっきりしたもんですや。

アナマロ ですが、この先、あなた様にロクなことは有りやしませんぞ。片耳づらいで済めばよいが。悪いことは云いません。このまま、ここから逃げてお帰りなさい。

耳男 ちよつと待て。俺は用無しだというのが。

アナマロ 待つてくださいよ。誰もあなたが未熟だから追出そうとは言っているのではありません。あなたの命にかかわることが、

耳男 ハッハッハ。ふざけちゃアいけませんや。ヒダのタクミは、仕事のほかには命をすてる心当りもない。

アナマロ (ため息をついて) はあ。長生きすれば、天下のタクミとうたわれる名人になる見込みもあるのに。

耳男 余計なことはもう、よしてくれ。ここへ来たときから、生きて帰ることは忘れていた。

アナマロ (あきらめて) 私につづいて参りなさい。

アナマロは先に立って歩き、その後と耳男が追う。

アナマロ 姫が、あなたに謝りたいと言っておられます。

耳男 ほう。殊勝なことだね。

アナマロ いいですか、もう、あとには引けませんぜ。

耳男 ふん。

アナマロ ここでお待ちなされ。

耳男、座つて姫を待つ。

耳男 そんなことよりも、俺は、早くミロクを掘り始めたいんだがね。いや、ミロクではない。魔神だがね。

するとやがて夜長姫登場。

夜長姫 よく来てくれました、耳男。ゲホゲホゲホ。

アナマロ ヒメ、ご無理をなさらぬように。

夜長姫 大丈夫です。アナマロ、外してくださらない？

アナマロ いや、しかし・・・(耳男をちらりと見る)

耳男 大丈夫です。二人で話をしましょう。

アナマロ そうですか、それでは、失礼します。

アナマロ、去る。

夜長姫 耳男、あなた、私のことを呪っているでしょう。

耳男 ほ、ほほう、随分と今日はおかしいですね。

夜長姫 お父様にも言われたの、当家の姫が耳男の片耳をそぎ落したときこそは申訳が立たない。ですから、私が死んでお詫ひ致します。どうぞ、私を殺してください。

耳男 え？

耳男、夜長姫の神妙な姿に、虚を衝かれて、

耳男 いやいや、はは、何を大仰なことを。そこまでは。

夜長姫 私は、あれからずっと考えていたのです。あなたの耳を切り落としてしまったとき、流れたたくさんの血、それに、あなたの悶絶している表情。私の手にのこった感触。

耳男 そうですか。いや、実はね、意外とすつきりしているんですよ。虫ケラに耳をかまれたと思えば、腹も立たない。

夜長姫 ほんとうにそう？

耳男 ほんとうにそうです。

夜長姫 あとでウソだと仰有ッてはダメよ。

耳男 そんなことは言いやしません。

夜長姫 そう言ってもらえて、少し、気持ちが楽になります。私たち、いい友達になれるかしら。

耳男 いやあ、それはどうでしょう。

夜長姫 あはははは、

耳男 ははははは、

二人、何となく笑う。

夜長姫 馬耳なんて、あなたのことを言っておめんなさい。

耳男 え？いや、いいんですよ。

夜長姫 これからは、馬耳じゃなくて、馬耳ハーフ & ハーフですね。

耳男 え？

夜長姫 片耳だから

耳男 いや、はは。

夜長姫 うふふ。

耳男 あはははは。

夜長姫 うふふふふふ。

耳男、ぎこちなく笑う。

夜長姫 笑ってくれるのですね。

耳男 え？ ええ、まあ。

夜長姫 嬉しい。私、あなたの笑顔、好きよ。

耳男 ああ、いや、それはどうも。姫の笑顔も素敵です。

夜長姫 虫ケラにかまれたほどだと、おっしやいましたね。

耳男 ええ、まあ。

夜長姫 では、もう一つの耳を切り落として大丈夫ということですね。

耳男 え？

夜長姫 うふふふふ。

耳男 あ、あはははは。

夜長姫、耳男に近づき、もう一方の耳を持つ。

緊張が走る耳男。しかし、身動きが取れない。

耳男 え？

夜長姫 私、本当に大変なことをしてしまったんだわ、

耳男 はあ、

夜長姫 私、とても反省をしているの。

耳男 はい、どうも。

夜長姫 あれからずっとあの時のことを考えていたの。あとき流れたたぐさんの血、それに、あなたの悶絶している表情。私の手にのこった感触。

耳男 それは先ほども。

夜長姫 忘れられないの。あのとときの、私の心の中に走った、不思議な恍惚。

耳男 え？

夜長姫 私、大変なことをしてしまったんだわ。

耳男 あの。

夜長姫 もう、知ってしまったから。あなたの耳をそぎ落とすのが、どれだけ気持ちの良いものか。

耳男 ご、冗談ですよ。

夜長姫 うふふふふ。

耳男 あ、はははは、

夜長姫 うふふふふ。

耳男 は、はは、

夜長姫、一閃。耳男のもう一つの耳をそぎ落とす。

耳男 あああああああ。

悶絶する耳男。

夜長姫 私、大変なことをしてしまったんだわ。だって、私は知ってしまったから！

夜長姫、うっとり耳を愛でながら去る。

第六章 耳男のミロク

猛烈に激しい音楽。耳男、なんとか立ち直り、ノミを持つ。

耳男、怒りに任せて像を刻む。

耳男 くそ。魔神を、魔神を刻んでやる。カカカカ、カカカカ。

耳男、恍惚の中でふと手を止めて、

耳男 それにしても、あの恐ろしい笑顔。

耳男、記憶を振り切るため、水を浴びる。

そして再び像を刻む。

耳男、地面を這っている蛇を捕まえ、

耳男 蛇か。

耳男、蛇の身体をひっさいて生き血をのんだ。そして蛇の死体を天井から吊るす。

耳男 蛇の怨霊がオレにのりうつり、また仕事にものりうつれ！

耳男、それを繰り返す。さらに血を欲する耳男。

耳男 なんだ、へびはみんななくなっちゃった。

へびを探す耳男。

耳男 ……もう、兎も狸も関係ねえや……

耳男、獣を捕まえると、胸をきいて生き血をしぼり、ハラフタをまきちらす。クビを斬り落して、その血を像にしたたせさせた。

耳男 血を吸え。そして、ヒメの十六の正月にイノチが宿って生きものになれ。人を殺して生き血を吸う鬼となれ。カカカカ、

やがて、像ができあがってくる。耳男、その像に自ら戦慄し、

耳男 おお。それは耳の長い何ものかの顔……。モノノケだか、魔神だか、死神だか、鬼だか、怨霊だか、オレにも得体が知れん！あとは、厨子か……

耳男 厨子を作る。

そして、倒れて眠り込む。

場面 A・B登場し、

A ヒダ随一の名人んとうたわれた名工のお弟子さんで、耳男殿の作品をご披露いたします。

B はい、それでは。

A ほほう。

B 見事な厨子に入っているのですな。

A ギー(厨子を開けて) な、なんだこれは！

二人 ギャあああああー！

高まる音楽。

第七章 百層倍も千層倍も気に入りました

場面変わって、朝。

寝ている耳男のもとに、扉をたたく音。

耳男 ……今日がヒメの十六の正月か、

音 ダンダン、ダンダンダン

なおも扉をたたく。

耳男 女中か……。うるさいな。いつものように、だまって外へ置いて行け。

夜長姫の声。

声 目がさめたら、戸をおあけ。

耳男 きいた風なことを言うな。オレが戸を開けるのは目がさめた時じゃアねえや。

声 私が居る内に出ておいで。

耳男、気づいて、

耳男 ん？この声は……、姫か。

恐怖がこみ上げてくる耳男。
夜長姫、姿を現す。

夜長姫 出てこなければ、出てくるようにしてあげますよ。ここに、火打石があるの。カチ、カチ、カチカチカチ、

耳男 慌てて戸口へ走り、カンヌキを外して戸をあける。

ヒメはニコニコと小屋の中へはいってくる。

ヒメは珍しそうに室内を見まわし、また天井を見まわした。蛇は無数の骨となってぶらさがっていたが、下にも無数の骨が落ちてくずれている。

夜長姫、その様子を見て感心し、

夜長姫 みんな蛇ね。

夜長姫、生き生きと感動がかがやく。

夜長姫 こんなことを思いついたのは、誰なの？ ヒダのタクミの仕事場がみんなこうなの？ それとも、お前の仕事場だけのこと？

耳男 たぶん、オレの小屋だけのことでしよう。

夜長姫 火をつけなくてよかったわ。燃してしまうと、これを見ることができなかったもの。

耳男 ……

夜長姫 珍しいミロクの像をありがとう。他の二つにくらべて、百層倍も、千層倍も、気に入りました。ゴホービをあげたいから、着物をきかえておいで。

夜長姫、去る。

耳男 呆然としている。そこへアナマロ。

アナマロ 風呂をお浴びなさい。

耳男 あ、ああ。

アナマロ いよいよ、大変なことになってしまいましたね。

耳男 え？

アナマロ 姫は、あなたの刻んだ像を大変、気に入りました。これまで、あんなに退屈そうにしていた姫が、あんなに笑顔で。ああ、恐ろしい、恐ろしい。

耳男 どういうことだ。

アナマロ あなた、どうなっても知りませんよ。

耳男 え？

アナマロ 次は、耳だけではすみません。もう、逃げることはできませんぞ。

耳男 恐怖心がこみ上げてくる。息遣いの荒い耳男。

耳男 殺される。殺される。間違ひなく、俺は殺される。(はっとして)・・・そうだ、この運命をぎりぬけるには

耳男、奥の間に通される。

アナマロ 夜長姫様のおなーりー

夜長姫、現れる。

夜長姫 珍しいミロクの像をありがとう。他の二ツにくらべて、百層倍も、千層倍も、気に入りました。

耳男 (必死に) 姫。今生のお願いでございませう！お姫さまのお顔、お姿を刻ませて下さいませう！それを刻み残せば、あとはいつ死のうとも悔いはございませう！

夜長姫、微笑んで、

夜長姫 あら、私が耳男にそれを頼むつもりでしたの。耳男が望むなら申分ないわ。

耳男 ……た、助かった。

夜長姫 耳男、顔をあげて。お前のミロクは皮肉の作だが、彫りの気魄、凡手の作ではないわ。よく、やってくれましたね。

耳男 ありがとうございます。

夜長姫 素晴らしい呪いだわ。

耳男 え？

夜長姫 耳男があまたの蛇を生き裂きにして、逆吊りにかけ、生き血をあびながら呪いをこめて造った呪いのバケモノ。

耳男 そんな、呪いだなんて、滅相もない、

夜長姫 いいえ、呪いでしよう？

耳男 いや、姫は、呪いなどというものを信じておいでなのですか。

夜長姫 耳男、

耳男 はい、

夜長姫 あなたが、それを一番にわかっているはずでしょう。素晴らしいものには、そういった情念がこめられているものなのでしょう。耳男、作ったあなたが、それを一番にわかっているはずでしょう。

耳男 ……

夜長姫 それでは、素敵な像を頼むわね。

夜長姫去る。

遺される耳男、決意してノミを持つ。

耳男 あの、像を…

像を刻み始める。

耳男 カ・・・、カ・・・、カ・・・、

やがて、耳男の刻んだ像に夜長姫の姿が浮かびあがり始める。

第八章 ホーソー神

静寂。

アナマロの語り。

姫の像が立っている。

アナマロ こうして、この像は刻まれ始めたわけです。ああ、すみませんね、話が長くて。みたらし団子、召し上がりますか。どうぞどうぞ。飛驒のみたらし団子は、甘くないんですよ。——え？ この話ですか？ そうですね、とても昔の話です。遠い、遠い、昔の話・・・ああ、話、続けてもよろしいですか。すみませんね。ひさしぶりのお客さんなもので。

音楽。この後に起こる出来事を予感させる。

アナマロ こうして姫の像を耳男が刻み始めていた頃、夜長の長者のムラには、ホーソーという恐ろしい病が流行り初めまして、

耳男 姫の像を刻んでいる。

場面 何とも言えない暗さが漂っている。

そこへアナマロ。

アナマロ、舞台に散らばっていたクワを、立てる。

耳男の集中力が途切れると、姫の像は、耳男の手元から消える。しかし耳男は、像を刻み続けるマイム。
アナマロ 窓の外を見て、

アナマロ ああ、また、死にましたな、

と、言いながら、アナマロ、もう一本、クワを立てる。

耳男 像を刻んでいる。

アナマロ この邸内で人間らしくうごいているのは、ヒメとあなたの二人だけですよ。

耳男 ひどいのか、その、ホーソーは。

アナマロ ええ、あの村も、この里も、死ぬ者はキリがありません。

耳男 それは、ケツタイなことだな、

耳男 像を刻んでいる。
アナマロ、また、クワを立てる。

アナマロ このクワはね、死んだ者の家から頂戴してきたものなんですよ。鉄は貴重ですからな。仕事は進んでおりますかな。
耳男 ええ、まあ、

アナマロ しかし、うまいことやったもんですな。

耳男 ん？

アナマロ 姫の像を刻むと約束すれば、しばらくは、あなたが殺されることもない。

耳男 いや、かねてから思っていたのだ。今生の思い出に、ヒメの笑顔を刻み残して殺されたいとな。オレは、恐ろしい物を作ろうとしていた。だが、真に怖ろしいものは、あのヒメの笑顔だ。

アナマロ ええ、そうでしょうか。

耳男 疫病も怖くはないね。どうせ、姫に殺される身だ。

アナマロ ほお。・・・でもあなた、殺される身にしては、なんだか、嬉しそうじゃあ、ないですかい。

耳男 え？

アナマロ 私も少しお暇をいただきます。

耳男 休みを？

アナマロ 私の母親も、これが大層な老人なんですがね、一人で暮らしておるんですよ。心配なので、ちょいと顔を見たい。では、失礼します。

アナマロ、去る。

耳男 アナマロが去ったあと、手を止め、窓の外を見る。

耳男 ああ、人が死んだ。

耳男 一本、クワを立てる。

そこへ夜長姫、

夜長姫 耳男。

耳男 姫。

姫、窓の外に駆けてくる。

耳男、姫の像を刻む仕事の続き。

夜長姫 やつぱり。この部屋の方が、よく見えるわ。ねえ、また人が死んだのよ。

耳男 え、ええ。

夜長姫 ホーソー。恐ろしいのね。村はずれの森の中に、死者を捨てに行くのよ。

耳男 愉快そうですね。

夜長姫 あのね、耳男の造ったバケモノの像を門の外へ飾って、ごらんなどいと言ったの。疫病よけのマジンナイに。

耳男 そうですか。

夜長姫 あら、見えなくなってしまうたわ、ツマラナイ。…ヨイシヨ。

夜長姫、嬉嬉としてクワを一本立てる。

耳男 ヒメの像も大分できてきました。ツブらな目

夜長姫 それじゃ。死者が行ってしまったので。

夜長姫、去る。

耳男 オレの像には、興味もなし、か。

耳男、再び、像を刻む。

耳男 カカ、カカ、カカ・・・カ・・・カ、

やがて、疲れて眠ってしまう。

朝が来る。そこへアナマロ。

アナマロ ああ、はいはいはい、おはようございます。

耳男、目を覚ます。

耳男 ああ、すっかり眠ってしまった。

アナマロ すがすがしいですな。

耳男 ん？

アナマロ ホーソーもすっかりいなくなりましたし、ほら、すっかり町も元の通りです。

耳男 ああ、そうか、

アナマロ たくさんの人が死にましたがね、

アナマロ、クワを立てていく。また、帽子を添える。

アナマロ クワを立てるのも疲れます。

耳男 ああ、

アナマロ ああ、クワを立てるから、クワ立てる。そういう言葉が生まれたのを知ってましたかな。耳男さんの企ては、進んできますかな。

耳男 いや、なんだか、な。

アナマロ まあ、せいぜい時間をかけておやりになることすな。

耳男 ん？あれは？ 随分、人が集まっている。

アナマロ ああ、ほら、あなたのミロクですよ。

耳男 え？

アナマロ あなたのミロクを拝んでいるのです。

耳男 俺の、ミロク？あのバケモノを？

アナマロ この屋敷には多数の人々が住んでいるのに、一人も病人がでなかったものですから、あなたの造ったバケモノが一躍村人に信じられたというわけです。

耳男 俺のミロクが、魔除けに？

アナマロ あなたのミロクも、今や、立派なお宝ですよ。

ビートルズ『ヘルプ』。『開運 なんでも鑑定団』のノリで。

ナレーション 本日の、開運なんでも鑑定しますよは、村をホーソーから守ったという伝説のミロク。

そこへナカジマ鑑定士。虫眼鏡で見て、

ナカジマ ううむ。いい仕事、してますねえ。

ナレーション 本人評価額は、控えめに一〇万円。果たして鑑定の結果は。

ナカジマ オープン・ザ・プライス。

効果音。十、百、千、万、十万、百万、千万、プライスレス。

ナレーション プライスレスです。

ナカジマ 未永く、大切にしてください。

ナレーション よ、巨匠！

ナカジマ 国民栄誉賞！

ナレーション いやあ、本当に、

ナカジマ 見事な、

音楽変わり、オドロオドロしく。

二人 化け物！ばーけーものー！

ナレーション 先生、今度はどんな化け物を作ってくれるんですか？

ナカジマ 素晴らしい化け物を、

二人 ばーけーもの。

耳男 カツカツカ。…あの笑顔…あの秘密は一体、なんなのだろう。あの、匂い。

耳男 像を刻み続ける。

音楽高まる。

第九章 深い夜

夜、耳男が仕事をしているところへ、夜長姫。

一転して静かな場面である。

夜長姫 耳男、

耳男 ああ、姫、

姫、仕事場に入ってくる。

耳男 ……(仕事をしながら) どうされたんですか、

夜長姫 ……あなたのバケモノ、大変な評判ね、

耳男 ……どうやら、そうらしいですね。

夜長姫 ……わざわざ、このお屋敷のところにまで上がってきて、門前でぬかずいて拜んで帰る者もあったわ。

耳男 ケツタイなことすな。

夜長姫 それにね、たくさんお供え物を置いていったわ。

耳男 ほう。

夜長姫 お前がうけた物よ。おいしくお食べ。

耳男 ふん、天下名題のホトケを造ったヒダのタクミはたくさん居りますが、お供え物をいただいた話はききませんや。あなた様へのお供え物にきまっているから、姫がおあ

がり下さい。

夜長姫 ……静かな夜ね。

耳男 手を止めて、

耳男 ええ、そうですね、

夜長姫 深い夜だわ。

耳男 ……深い、ですか。

夜長姫、静かに語る。

夜長姫 ええ、荒野に大地の裂け目があつてね。その裂け目は、どこまでもどこまでも深く続いているの。見下ろすと真っ暗で何も見えなくて、底の方からは、白い霧が上がっ

てきて、オンヨロ口、オンヨロ口、という声が聞こえる気がするわ。

耳男 恐ろしいですな。

夜長姫 そんな、深い夜。

耳男 なるほど。

夜長姫 ゾクゾクするわ。

耳男 ……

耳男 再び、像を刻む。

夜長姫 私ね、あなたを不幸にしているかしら？

耳男 え？

夜長姫 ときどき思うのよ。私は、ただ、私の見たいものを見て、私のしたいようにして、私の幸せを生きているだけなの。でも、どうやら、私の幸せは、みんなの幸せではないのよ。

耳男 まあ、そうかもしれませんね。

夜長姫 自分が生きていることで、人を不幸にしていることってあるものじゃない？

耳男 はあ。

夜長姫 でもね、あなたの不幸は、みんなの幸福なのかもしれないよ。

耳男 え？

夜長姫 耳男、お前が呪いをこめて造ったバケモノはほんとうにホーソーの神を睨み返してくれたのよ。私は毎日楼の上からそれを見ていたわ。

耳男 そうですか。

夜長姫 耳男、でもお前がいまお造りのミロクには、お爺さんやお婆さんの頭痛をやわらげる力もないわ。

耳男 ……え？

夜長姫、耳男を見つめる。耳男、固まってしまう。

夜長姫、ニツコリと笑う。

耳男 い、いや、そんなはずは。

夜長姫、またニツコリと笑う。

耳男 ……

夜長姫、去っていく。

第十章 夜長姫のくわだて

不穏な音楽。物語の不安感は、いよいよ現実のものとなってくる。

アナマロと夜長姫。

アナマロ ホーソーが通りすぎて五十日もたたぬうちに、今度はちがった疫病が村をこえ里をこえて渡ってきたのです。

夜長姫 アナマロ。

アナマロ はい。

夜長姫 季節は、畑仕事の頃合よ。村人たちもこの前のホーソーの時のように、部屋に閉じこもっている訳にはいかないでしょう。

アナマロ しかし、村人たちは悪病を恐れています。

夜長姫 アナマロ。

アナマロ はい。

夜長姫 畑仕事を止めるわけにはいきません。それこそ、村人たちの命がかかっているのですから。

アナマロ ……はい。

夜長姫 部屋の中に閉じこもっていないで、野良仕事をしなさいと、村人たちに伝えて頂戴。

アナマロ ……分かりました。

夜長姫 アナマロ、

アナマロ はい、

夜長姫 あなたのお母さんも、例外ではありませんよ。

アナマロ …….

夜長姫 この難局に立ち向かうためには、村人みんなが力を合わせなくてはなりません。

アナマロ ……分かりました。

アナマロ、去る。

夜長姫 ふんふん。

夜長姫、悪戯めいた笑顔。

耳男のもとへ夜長姫。耳男、像を刻んでいる。

夜長姫 耳男、今日も、死んだ人があるのよ。

夜長姫、クワを立てる。

耳男 (像を刻んでいる)

夜長姫 (百姓たちがね、野良へ出ると、日ごかりの畑でキリキリ舞いをしたあげく、しばらく畑を這いまわって死んで行くの。)

耳男 (像を刻んでいる)

夜長姫 素晴らしいわね。

夜長姫 素晴らしいわね。

夜長姫 素晴らしいわね。

夜長姫 素晴らしいわね。

耳男 虚ろな精神状態を無理に明るく振舞ってごます。

アナマロ おや、そりやまた、どうして、

耳男 …… 姫に頼まれてね。

アナマロ あなたも、姫の言いなりですな。ああ、あなたも、というところ、察してくださいね。

耳男 …… なるほどね。

アナマロ お仕事の方は、良いのですかい。

耳男 ああ、この姫の像がね。

アナマロ 進まないんですかい。

耳男 山に入るのはいいかもしれない。気分転換をしてくるよ。

アナマロ 行ってらっしゃいませ。

耳男 山へ分け行って、へびを取る。

静かな、だが、不安を掻き立てるような音楽。

耳男 へびを取りながら、

耳男 ふん、なんでまた、俺は、ヒメの言いなりになってしまっているんだか。……（へびを取っている）ヨイ、と。……このへびを見たら、ヒメはなんて言っただろうか。「まあ、素敵」。は、はは……。あの笑顔で感嘆の声を上げるんだ。……そうか、俺は……。俺は姫のあの笑顔を見たいのかもしれない。あの、ぞつとする笑顔を……

第十一章 カタストロフ

耳男 袋をもつて戻ってくる。出迎える夜長姫。

夜長姫 耳男 ありがとう。袋をもつて、こちらへ来て。池のほとりにバケモノのホコラがあるでしょう。

耳男 ああ、俺の作ったバケモノ。

夜長姫 ホコラにすがりついて死んでいる人の姿が見えるでしょう。お婆さんよ。あそこまで辿りついてちょっと押んでいたと思うと、にわかに立ち上ってギリギリ舞いをはじ

めたのよ。それからヨタヨタ這いまわって、やっとホコラに手をかけたと思うと動かなくなってしまったわ。

耳男 あんなバケモノ、魔よけの役に立たないのは分りきっているのに。

夜長姫 はあ、下界の眺めをタンノーしたわ。ねえ、袋の中の蛇を一匹ずつ生き裂きにして血をしほってちょうだい。

耳男 …… え？

夜長姫 お前はその血をしほって、どうしたの？

耳男 …… チョココにうけて飲みました。

夜長姫 お前がしたと同じことをしてちょうだい。生き血だけは私が飲みます。早くよ。

耳男 ……

夜長姫 早く。

耳男 袋の蛇を取り出す。そしてややためらうが、裂いて生き血をしぼる。そして、また一匹、と。

耳男 ギュルギュルギュル、ピシャ、シャツ、ギュルギュル、ギュル・・・

耳男 チョコに生き血を注ぐ。

夜長姫 頂戴

夜長姫に渡す。夜長姫、生き血を一息にのみほす。

耳男 血を飲んで恍惚とする夜長姫の姿を見て、慄然とする。

夜長姫 もう一ツペン山へ行って袋にいっぱい蛇をとってきて。

耳男 姫・・・

すぎるような表情の耳男。だが、

夜長姫 陽のあるうちは、何べんもよ。この天井にいっぱい吊るすまでは、今日も、明日も、明後日も。

耳男 姫、もう、こんなことは、

夜長姫 ゲホゲホゲホ、

耳男 ……

夜長姫 ……早く。

耳男 狂気に苦しみながらも、再びでかける。

夜長姫 何べんもよ。何べんも。そして、ドツサリとってちょうだい。

耳男 ヘビを取っている。

夜長姫 ほら、あすこの野良に一人死んでいるでしょう。つい今しがたよ。クワを空高くかざしたと思うと取り落してキリキリ舞いをはじめたのよ。そしてあの人が動かなくなっただけで、ほら、あすこの野良にも一人倒れているでしょう。あの人がキリキリ舞いをはじめたのよ。そして、今しがたまで這ってうごめいていたのに。

耳男 生き血を絞る。

夜長姫 耳男よ。ごらん！あそこ、ほら！キリキリ舞いをしはじめた人がいてよ。キリキリと舞っていてよ。お日さまがまらしいよ。まるでお日さまに酔ったよう。ほら、あの人。こうやって両手をひろげて、空の下を泳ぐようにユラユラとよろめいている。カガシに足が生えて、左右にくの字をふみながらユラユラと小さな田を踏み廻っているようだわ。ああ、バツタリ倒れて、這いはじめた。．．．もうじき死ぬわね。

耳男 ．．．．．

夜長姫 まだとても早いわ。ようやく野良へ人々がでてきたばかり。今日は何べんも、何べんも、とってきてね。早く、できるだけ精をだしてね。

耳男 でかける。

耳男 たただだへびを取り続ける。

夜長姫 ねえ、耳男。今日は、どれだけの人が死んだと思う？

耳男 ．．．．．(訳が分からなくなっている)

夜長姫 ほら。お婆さんの死体を片づけに、ホコラの前に人が集っているわ。あんなに、たくさんの人が。

耳男 生き血を絞る。

夜長姫 あれ、あんなところにアナマロが、

耳男 ．．．．．！

耳男も、町を見下ろす。

夜長姫 何をやっているのかしら。

耳男 ．．．．．アナマロの、．．．．．お母さん、

夜長姫 そう、アナマロの、お母さん。死んだのね、

耳男 ．．．．．(言い知れない感情がこみあげてくる)

夜長姫 ああ、私の目に見える村の人々がみんなキリキリ舞いをして死んで欲しいわ。その次には私の目に見えない人たちも。畑の人も、野の人も、山の人も、森の人も、家の中の人も、みんな死んで欲しいわ。

間。

耳男 ．．．うう、．．．はあ、．．．はあ、

耳男 なんとか自分の中の正気の部分を探し出そうとする。

耳男 ．．．あんだが、

夜長姫 え？

耳男 あんたが殺したんだ！

夜長姫 ……？

耳男 あんたが、殺したんだー！アナマロの、お母さんを！

夜長姫 私が？

耳男 あんたが、畑仕事に出るように、村人や、アナマロのお母さんに言ったから、こうして村人たちがどんどん、どんどん死んで行く！

夜長姫 そうかしら。畑仕事をしなかったら、もっともって死者が出ると思うけど。

耳男 呪い殺してるんだらうー！

夜長姫 え？

耳男 あんたが！こうして、へびを逆さに吊るして、村人たちを呪い殺しているんだー！

夜長姫 ……？

耳男 (恐怖がこみ上げて来て) 村の人間を、あなたが村の人間をみな殺しにしてしまう…

夜長姫 そうよ。

夜長姫、きつぱりと。

耳男 ……え？

夜長姫 私が呪い殺しているの。耳男、あなたが教えてくれたんじゃない。へびの生き血を飲んで、呪いをかけるの。村の人間、みんな。

耳男 ……。(呆然)

夜長姫 あはははは、嘘よ。呪いなんか信じているの？

耳男 ……？

夜長姫 呪いをかけたところで、人が死ぬわけではないじゃないの。ただ、

耳男 ……？

夜長姫 そうだったら、面白いな、と思っただけ。

耳男 ……面白い？

夜長姫 そう、面白いでしょう？

耳男、いよいよワケが分からなくなってくる。

耳男 ……ひ、人の死が、面白いのですか。

夜長姫 そうよ。いいえ、違うわ。ゾクゾクする感じ。その得体の知れない感じが、私を刺激するの、

耳男 狂ってる！

夜長姫 そうかしら。あなただって、そうじゃない。

耳男 え？

夜長姫 あなた、私のこと好きでしょう？

耳男 なんだって？

夜長姫 私の得体のしれないところが好きなんでしょう？私のつかみどころのないところが好きなんでしょう？

耳男 な、何を、

夜長姫 だって、そういう目をしてるもの。だから、私も、あなたの求めるまま、こんな不思議にしているのに。

耳男 ……

夜長姫 私の、不思議が好きなんですか？

耳男 ……

夜長姫 狂っている私が好きなんですか？

耳男 近づくなー！

姫、ニツコリと笑ってから外を見て、

夜長姫 どうとう動かなくなったわ。なんて可愛いのでしょうかね。ああ、お日さまがうらやましい。日本中の野でも里でも町でも、こんな風に死ぬ人をみんな見ていらっしやるのね。

耳男 ……

夜長姫 あれ？アナマロったら、泣いているのかしら。

耳男 ……

夜長姫 お母さんにすがりついて、あんなに泣き叫んで、

耳男 あああああ…、

夜長姫 あはははは。ああ、可愛い。

耳男は自らの手に、ノミが持たれていることに気づく。

激しく混乱する耳男だが、そのノミ、一つの縫れる囊となる。

耳男、左手を夜長姫の左の肩にかけ、だきすくめて、右手のノミを胸にうちこんだ。

耳男 わああああああ、

時間が止まる。

ヒメは目をあけてニツコリ笑った。

夜長姫 ……ねえ、耳男… サヨナラの挨拶をして、それから殺して下さるものよ。そうしたら、私もサヨナラの挨拶をして、胸を突き刺していただいたのに。

耳男、我に帰って、激しく動揺する。

耳男 ……あ、…あ、…うわああああ、

夜長姫 好きな物はね、…耳男、本当に好きな物は、咒うか殺すか争うかしなければならぬものだわ。ねえ、耳男、いつも天井に蛇を吊して、いま私を殺したように立派な仕事をしてね、

姫、力尽きる。

耳男 絶叫。

耳男 ああああああああー！

終章 命の像

アナマロ、舞台の中心にクワを立てる。

そして、そこに姫の着物をかける。

アナマロの語り。

アナマロ こうして、この姫の像は、刻まれた、というワケです。本当に、生きていたようにしょう？ いやあ、すみませんね。こんな老人の長い話に付き合わせてしまって。――ええ。え？この話、いつの話かって？ そりゃあ、昔の話ですよ？ええ？ この話に出てくるアナマロというのは・・・私の？ おじいちゃん？ いえいえ。ひいおじいちゃん？ なにをおっしゃっているんですか。どちらかというと・・・ああ、私ですよ・・・おっと、木彫りの像の分際で、出過ぎたマネをしないでくださいね。つつい、お客様が嬉しくて。

アナマロ、静止。

全てを浄化していくような、静かな音楽。

そこへノミを持った耳男、登場。

アナマロの像にノミを入れる。

耳男、命を刻み続けていく。

あれからずっと、耳男は命を刻み続けていた。